



ISSN 2185-9787

# さやばね

ニューシリーズ

No. 40 December 2020

日本甲虫学会

SAYABANE N. S.  
The Coleopterological Society of Japan

## 近代地方都市の螢狩, (I). 福岡篇

保科英人

〒 910-8507 福井市文京 3-9-1 福井大学教育学部

鎌倉時代後期の歌人の冷泉為相（1263–1328）に以下の和歌がある。「行く螢神だに消たぬ思ひとやみたらし川の波にもゆらん」（『為相百首』）。為相はホタルが放つ光を、神でさえ消せぬ火に準えた。このように平安・鎌倉時代の上流階級の人々は盛んにホタルを己の作品に詠み込んだ。時代が近世になり、文化の主要な担い手が庶民層に移行すると、ホタルを愛する文化もまた庶民のものとなつた。江戸期には既にホタルがペット昆虫として売られていたのである（加納、2011）。

文化が支配者層の手を離れ、庶民によって創られるようになる。まこと結構な話であるが、明治維新以降に生を受けたゲンジボタルやヘイケボタルは受難の時代を迎えた。明治の前半、ホタルが縁日等で売られ、数匹が虫籠に入れられ、家の軒下でぶら下がっている頃はまだよかった。しかし、やがて鉄道インフラが整備され、ホタルの大量輸送が可能になると、十万単位のホタルをばら撒く螢狩りが東京各地で行われるようになったのだ。ホタルは全国各地で乱獲され、専門業者によって東京の鉄道会社や百貨店に卸されたのである（保科、2018）。琵琶の名手であった貞保親王（870–924）が「沢辺なる螢を袖に宿しつつ色たれ衣と藻塩焼くらん」（『曾我物語』）とせいぜい数十匹のホタルを袖に包んで女性に贈呈していた牧歌的風景は今や遠い昔、日本の近代は十万、百万単位のホタルをたった1日で消費した、ホタル使い捨ての時代でもあった。

筆者は明治・大正・昭和戦前期の近代日本にお

けるホタルの売買や放虫の実態を既に報告済みである（保科、2017a, 2018; Hoshina, 2018）。しかし、それらの概説で紹介したホタル文化は、ほとんどの舞台が東京である。では、近代地方都市ではホタルは乱獲されなかったのか？あらかじめ買い集めたホタルを大量に放した後、客に捕らせる螢狩りは開催されていたのか？筆者はそれらの点に興味を持ち、地方都市における近代ホタル文化事情の調査を開始した。本稿ではまず福岡の事例を取り上げる。（II）以降では名古屋や京阪神のホタル文化を順次概説していく所存である。

### I. 恐ろしく効率が悪い地方新聞の記事探索

自分の住む町のいつ、どこで、どんな催し事があるか。現在なら、インターネット、フリージャーナル、市役所広報などが主要な情報源であるが、近代期日本では新聞がその重要な一角を担った。また、ホタル、鳴く虫、カジカガエルの市場価格や飼い方なども頻繁に新聞記事となった（Hoshina, 2017, 2020；保科, 2017b；保科・宮ノ下, 2019）。近代日本人がこれらの生き物に強い関心を抱いていた証左である。

文化昆虫学的観点で見た場合、記事だけでなく新聞紙面に掲載された広告も重要資料となりうる。たとえば「〇月△日某公園にて螢狩開催」のような広告である。新聞は今も昔もデタラメを書くことが少なくなく、記事の鵜呑みは危険である（保科, 2016）。また、新聞記事になるか否かは全て記者の胸三寸、螢狩りの記事がないからと言って、その

町で蛍狩りが行われなかつたことの証にはならない。しかし、催し事の新聞広告の場合、雨天により当日決行されなかつた、との事態はありえても、広告に書かれていた内容自体を疑う必要はまずないだろう。近代期の新聞は文化昆虫学上の欠かせないお宝材料なのだ。

近代期の新聞が研究材料として重宝されるのは史学の世界でも同じである。ただし、日露戦争前後の新聞論説を研究した片山（2009）を読むと、二つのある特徴に気付く。まず片山博士が資料として用いたのは「二六新報」「萬朝報」「日本」「東京朝日新聞」「時事新報」「都新聞」「毎日新聞」（注、現在の毎日新聞とは無関係の同名別紙）などで、大半が紙媒体の復刻版が発刊されている新聞であることがわかる。2番目に、これら復刻版が出ていた新聞は、いずれも東京府下の新聞である。実は、そもそも地方紙は復刻版が刊行されていないとの実情がある。

国会図書館や県立図書館に行っても近代期の新聞の原紙はまず見せてもらえない。よって、調査者は近代の新聞記事を電子データベース、復刻版、そしてマイクロフィルムのいずれかを用いて調べることになる。戦前期の新聞の電子データベースは東京朝日新聞、大阪朝日新聞、読売新聞のみ存在する（詳細な説明は省くが、現在の毎日新聞のデータベースの『毎索』は検索機能が役に立たない）。そして、上述のように復刻版が発刊されている新聞は東京の新聞ばかりだ。となると、データベースと復刻版を調査に利用する限り、得られる情報は東京中心になってしまふのは当たり前なのである。

片山博士が利用した明治期の新聞と、保科（2017b, 2018）で引用した新聞のタイトルがほぼ重なっているのは偶然ではない。検索機能が使える電子データベースを除くと、莫大な新聞文字情報の中から、必要な記事を探し出すには、紙媒体の復刻版をひたすらめくるしかないからである。

しかし、紙の復刻版をめくる作業はまだましである。近代の地方新聞は復刻版が存在せず、データベース化もされていない場合がほとんどだ。よって、近代の地方新聞の中身を知りたければマイクロフィルムを回すしかない。そして、このマイクロフィルムの新聞記事調査は、復刻版の新聞と比較すると恐ろしく時間効率が悪い。これは、筆者が「財務省サマがよく仰る『日本の大学は論文生産性が低い！』とのご指摘、まことごもっとも」と自虐的に述べた、劣悪な方法そのものである（保科、2020b）。

大日本帝国憲法発布に対する金沢市民の反応を新聞で調べるのは簡単だ。発布日は明治22年2月11日とわかっているので、その数日後の北國新聞の記事をマイクロフィルムで閲覧すればよい。しかし、ホタルの記事が掲載されるのは何月何日か、またそもそも記事になっているのかの事前予想が全くつかない。結局のところ、ホタル関連の地方新聞記事を読みたければ、5月下旬から6月下旬までの一ヶ月分の新聞のマイクロフィルムをただただ回すしか方法がないのである。

地方紙でも「神戸又新日報」であれば神戸市文書館が、「新愛知」「名古屋新聞」であれば名古屋市立鶴舞図書館が、それぞれの館が独自に紙に打ち出した非刊行物の自製復刻版を利用できる。しかし、近代期の福岡の新聞記事探索となると、どうやらマイクロフィルムを回すしか方法はなさそうだ。本稿は、筆者が国立国会図書館で近代福岡の新聞のマイクロフィルムを延々と回し続けて、ようやく得られた記事情報をもとに仕上げた血と汗の結晶である。

本稿で引用するのは、主に福岡県の地方新聞である福岡日日新聞と九州日報の2紙である。2紙は大東亜戦争中に政府が推し進めた一県一紙により、昭和17年に合併、現在も存続する西日本新聞となった（高野編、1951）。以下、福岡日日新聞を引用する際は「新聞」を省き、「福岡日日」と略号を用いることとする。

なお、保科（2018）で言及したように、近代の新聞記事に出てくるホタルとはゲンジボタルとヘイケボタルの両方を指し、具体的にどちらの種であるかはほとんどの場合判定ができない。以下に記すホタルは両水生ホタルを合わせた名称と理解していただきたい。

## II. 近代日本の螢狩りの実態

昨今、紅葉狩りとの単語を見ることはあっても、螢狩りとの文言を目にする機会はあまりなくなつた。ゲンジボタルやヘイケボタルは種の保存法対象種ではないが、社会的に「ホタル捕るべからず」との倫理が定着しているからだ。しかし、近代日本人の螢狩りは文字通り「狩り」であった。我らが先人はホタルを愛でるだけに止まらず、せっせと捕つては虫籠に入れて持ち帰っていた。

また、同じ螢見物であっても、近代と現代のホタル観賞は様相が大きく異なる。まず、近代の人々はホタルの名所とされる場所に殺到した。たとえば文豪田山花袋の紀行文に出てくる武州大宮は、東京近郊の最大の名所として、東京から大勢

の人がホタル見物に訪れた(田山, 1923a, b)。ホタル出盛りの土日には上野と大宮の両駅は子供連れの客で大混雑したと言う(大正9年6月15日付東京朝日新聞)。また、明治23年5月27日に大宮公園の萬松樓に宿泊した有栖川宮熾仁親王も「三沼川凡七町餘螢狩行向、兩岸ニ群集ニテ壯觀ナリ」と、ホタルよりも見物客の多さに感嘆している(日本史籍協会編, 1976)。

現在のホタル観賞会で御座を敷いて酒盛りを始めようものなら、管理人につまみ出されるのがオチだ。しかし、近代はそうではなかった。明治34年発刊『東京風俗志』は東京から大宮へ足を運ぶ客を「大宮公園は螢の名所など稱へらるれば、汽車の便を藉りてこゝに遊ぶ人も多けれど、螢の有無を外にして、一夜の清遊を試むるに過ぎず」と形容する(平出, 1968)。清遊などと優雅な熟語が使われているが、何のことではない。ようするに男どもはホタルをダシにして酒を飲みたいだけなのである。夕方汽車で東京を発ち、大宮の旅館でホタルを見ながら酒を飲み、翌朝帰って来ると言うのが近代東京人の楽しみであった。

特定の名所への客の集中、酒を片手に呑めや歌えや。近代の螢見物は、静寂な雰囲気の下、ホタルの幻想的な光に目を細める現代のホタル鑑賞とは異なり、むしろ我々が毎年4月に開くお花見に近い遊興であることがわかる。つまりホタルはお祭りの必要小道具にすぎないのである。こう理解すると、以下に述べる近代日本人のホタルの扱いの雑さ、荒っぽさがしつくりと頭の中に入ってくる。

### III. 明治30年代の福岡のホタルの名所

東京では明治30年代になると、旅館や料亭が数十万単位のホタルを遠方から取り寄せ、客寄せにばら撒く商売が定着していた(保科, 2018)。一方、筆者は今のところ同時期の福岡県内でのホタル大量放虫を確認できていない。明治30年代~40年代初めの福岡県内のホタル関連の新聞記事は、名所の紹介にとどまっていた。明治35年6月4日付福岡日日は、県内のホタルの名所として船小屋、早良郡室見川、筑紫郡和田、柏屋郡猪野、今在家などを列記している。また、明治43年5月29日付福岡日日は浮羽郡千年村櫻井長野水神社を名所として紹介した。いずれの記事も近隣からのホタル見物の客で賑わっている、と記している。

### IV. 船小屋の螢見物

享保3年(1718年)刊行の上嶋鬼貫著の俳諧論説『独ごと』に以下の一節がある。「螢は、ひとつふ

たつ見え初むる軒ば、夜道行く草むら、瀬田の奥に舟し入れて、花と見る柳の盛」鬼貫はホタルが柳の茂みの中で光っているのを柳の花に例えたわけだが、舟に乗ってホタルを見て遊興との発想が、明治以前の段階で既にあったことがわかる。明治20年代後半には、武州大宮の旅館は舟上でホタル見物ができるサービスを提供し、東京からの客を誘致しようと新聞広告を盛んに出していた(明治28年5月25日付都新聞)。

明治45年、福岡の船小屋温泉(現在筑後市)は福岡日日新聞と九州日報の2紙に「船小屋の螢今が盛り」との簡素な広告を載せた(同年5月25日付福岡日日; 6月1日付九州日報)。現在の筑後市の中心駅で、船小屋温泉最寄りの羽犬塚駅は、明治24年に九州鉄道の久留米一木葉が開通した時に建設された。同線は明治42年に鹿児島まで延伸されている。さらに明治43年に船小屋鉱泉組合が設立され、温泉観光業の発展が図られるようになった(筑後市史編さん委員会編, 1995)。船小屋温泉が明治末になってホタルを売りにした新聞広告を出すようになったのは、営業攻勢をかける体勢が同温泉に整ったことも関係しているだろう。

船小屋のホタルは「船小屋八景」の一つに数えられるほどの著名な存在であった(江崎, 1984)。そして、近藤(1913)によれば、大正時代初期、矢部川の川面一帯を埋め尽くしたホタルは「銀河地上に移るの奇觀」と称されるほどの数であったと言う。「船小屋のホタルは体が大きく、その光も他地方のホタルとは比較にならない」との自慢は、昆虫学的には胡散臭いが、同地のホタルの出盛りの時期には福岡、熊本、佐賀から見物客が押し寄せるほどの名声があったのは確かだ。

見物客がホタルを目の前にして宴会を開いていた武州大宮同様、船小屋の客も大人しくホタルを眺めていたわけではない。川に面した旅館の部屋はホタル見物客にすっかり占領され、一つの部屋がドンチャン騒ぎを始めると、隣の旅館の客も負けずにはやし立てる。そして、下流の柳川方面から繰り出してきた螢見の遊覧船は三味線太鼓を派手に鳴らしていたそうだから、もうむちゃくちゃである。とにかくホタルの季節は、船小屋は多くの客でごった返したらしく、近藤(1913)はその時期の船小屋を「急に景氣付いて町全體の空気が上々調子の人をそぞる様になる」と形容した。なお、同じ矢部川水系の花宗川沿いの八女郡福島でも、螢見の多くの男女が集まると、三味線太鼓の囃子で賑わったそうだ(明治43年6月3日付福岡日日)。ホタルを目の前にして大騒ぎするのは、当

時の筑後地方では普通に見られた光景に違いない。船小屋温泉も武州大宮同様、観光客を舟に乗せてホタルを見せるとの商売法を採用した。大正初め頃は1円程度で舟を一艘借りられたと言う(近藤, 1913)。なお、この時代の1円は大工の日当にほぼ相当する(森永, 2008)。よって、舟のレンタル料は現在のディズニーランドのごとく決して安くはないのだが、1年に1回程度なら庶民でも十分味わえる楽しみであったわけである。

ちなみに、船小屋以外の矢部川沿い各地もホタルの名所とされた場所は多く、北山村山下、三河村宮野、上妻村津ノ江、そして矢部川水系の星野川沿いでは川崎村山内などにも見物客が集まった。昭和に入ると、これらの名所では従来の舟上からの見物に加え、自動車が客を運ぶサービスもあったと言う(昭和4年5月21日付福岡日日)。

## V. 鉄道会社によるホタル乱獲

船小屋温泉が新聞広告を出し始めた明治45年、博多でも新しい蛻狩りが企画された。福博電車主催の「大ほたる狩り」が同年6月5日から7日まで、福岡市の西公園で催されたのである。新聞広告によると矢部川から取り寄せた数十万頭のホタルが西公園に放されたと言う(明治45年6月4日付福岡日日; 同日付九州日報)。明治14年開園の西公園は桜が多く植えられ、「騒客の來り遊ぶもの多し」と博多っ子の人気スポットだった(入江ら, 1902; 小谷, 1924)。よって、西公園はこの手の催し事にはうってつけの場所だったわけである。

問題は福博電車がその数十万頭のホタルをどうやって調達したかである。東京では明治30年代の時点で十万単位のホタル放虫が常態化していたので(保科, 2018), 主催者が近隣の取り扱い業者に発注すれば、簡単に数を揃えられた。やや後の時代になるが、大正後半の小田原にあった蛻卸売り業者は年間1千万頭ものホタル取り引きを行い、東京の百貨店に出荷していた(大正11年5月8日付東京朝日新聞)。

しかし、明治末の福岡市に現在の九州随一の大都市の片鱗は見えない。明治44年時点で同市の人口は87,000人足らずである(福岡市役所編, 1939)。当時の福岡の都市の規模ではホタルの大口の注文に答えられるだけの業者がなかったようだ。そこで、やむなく福博電車は一般市民から50万頭のホタルを買い上げることにしたのである(明治45年6月6日付福岡日日)。そうなると、その後の市民の行動は簡単に予想がつく。「船小屋の螢 今が盛り」との新聞広告を見たせいだろうか、人々は船

小屋に押し寄せ、ホタルを捕りまくったのである(明治45年6月6日付福岡日日)。

当時の蛻狩りでは市民は自由にホタルを捕ることができた。明治45年6月の西公園での蛻狩りの1日目、福博電車の社員は日暮れからホタルの放虫を始めたが、殺到した人々によってすぐに捕りつくされてしまった。すると、後から来た客から「ホタルなんておらんたい。福博電車は騙しやがったな!」との怒号が飛び交い、公園の空気は頗る陥落になってしまった。狼狽した電車社員はやむなく数百頭のホタルを抱えて電柱に登り、そこから放し始めた。しかし、またもや数百人の客が駆け寄って来て、押し合いへし合いの大混乱に陥ってしまった。6月7日付九州日報はその様子を「惨憺たる西公園の修羅劇」と報じている。ここでは「大震災が起きたても整然と並ぶお行儀良い日本人」なんぞカケラも見られない、と明言しておこう。そして、明治45年は今からたった百年前なので、大和民族の礼儀正しさは別に遺伝形質ではないことがわかる。

なお、福岡県人の名誉のために申し上げておくが、ホタルを前にして振る舞いが粗暴になるのは、何も当時の博多っ子だけではない。大正7年東京毎日新聞主催で、日比谷公園で行われた蛻狩りでは、人々はやはりホタルが入った虫籠に殺到し、哀れホタルは放される前に虫籠ごと踏みつぶされてしまった(同年8月5日付東京毎日新聞)。どうやら明治末の福岡の惨劇の様子は東京に伝わっていなかつたらしく、東京毎日新聞側は群衆対策を何もしていなかつたのだ。ホタルに目の色を変えるのは、当時の日本人全体に見られる性癖だったわけである。

福博電車は大正2年にも西公園で同様の蛻狩りを開催した。新聞広告によると「六七八 三日間 每夜正八時 西公園ほたる狩 ほたる籠進呈」とある(同年6月6日付福岡日日)。福博電車はホタル籠を配布する新サービスを導入したことがわかる。余談ながら、蛻狩り最終日に西公園で風呂敷に包まれた死体が発見されたのが(同年6月9日付福岡日日), 会場がパニックになったかどうかは定かでない。

大正3年、福博電車は「螢人形」との新聞広告を出した(同年5月31日付九州日報)。螢人形とは如何なるものか、いまいち想像がつかない。同広告によれば、遊郭のあった新柳町で10日間蛻狩りの余興を催したらしい。そして、電車乗客は無料入場できるとのサービスが受けられたとのこと。

筆者は現時点で近代期に福岡県内で発刊された

全年代の新聞に目を通せているわけではない。よって、上記以外にも福博電車主催の蛍狩りはあったはずである。近代期を通して福博電車がかき集めたホタルの数は1千万頭を越えたに違いない。同電車によって、福岡県内のホタルは乱獲されたのである。

## VI. 新聞社主催の蛍見物ミニツアー

大正8年6月4日付福岡日日は粕屋郡大川村郡立農学校付近の篠栗川をホタルの名所として紹介した。当時、博多方面から篠栗線を利用した見物客が多かったらしい。福岡日日新聞はこの篠栗川のホタルに目を付けた。昭和4年6月5日、福岡日日新聞は「篠栗螢見會」の参加者募集の案内を掲示した。参加者は100名まで、期日は6月8日、午後18時に吉塚駅発、同日午後22時半同駅帰着の新聞社主催のミニツアーである。もっとも、会費は無料、電車賃30銭のみ徴収のことなので、新聞社が儲かったわけではなさそうだ。

どうやら新聞読者からの申し込みが殺到したらしく、当日は当初の予定人数の倍の200余名が参加した。一行が篠栗町に着くと、多数の町民の出迎えを受けたほか、随伴した新聞社事業部長と篠栗町長の挨拶があった。現代人から見れば、同じ県内、しかも片道たった15分の距離から来た日帰りの客に対しては、随分仰々しい話である。一行は蛍狩りを十分に楽しみ、またカジカガエルの鳴き声に聞き惚れた。そして、蛍袋や絵葉書、青梅漬けをお土産に貰い、多くの町民に見送られ、一行は無事吉塚駅に帰着した(同年6月9日付福岡日日)。

篠栗町は旅行客から料金を取っていないどころか、お土産を配っているわけだから明らかに赤字である。町側から福岡日日新聞にいくばくかの謝礼が支払われた可能性もある。町長自ら顔を出したこの歓待ぶりは、当然「来年もぜひホタルを見に来てください。ついでに物産も買ってください」との篠栗町の宣伝活動なわけだ。昭和初期のホタルは、町側が広告費を支出しても、それを上回る利益が見込める、重要な観光資源だったことがわかるのである。

## VII. 全国に先駆けたホタルの航空輸送と皇族へのホタル献納裏事情

明治時代後半以降、武州大宮や江州守山からのホタルの皇族への献納が、新聞記事に時折散見されるようになる(保科、2018)。昭和期になると、福岡県浮羽郡が献上地に名乗りを上げた。明治末

には船小屋温泉は有名なホタルの名所として名高かったわけだが、福岡のホタル献納が昭和に持ち越されたのは、おそらくは福岡が東京から遠く、輸送中に大量死してしまうとの地理的要因による。昭和に入って福岡浮羽郡が献上地に参入できたのは、九州内の鉄道網の整備が進み、昭和3年に浮羽郡と博多は国鉄で結ばれたこと(浮羽町史編集委員会編、1988)、東海道線の高速化が進んだこと(老川、2016)、昭和4年に名島空港が完成したこと、同じく昭和4年に大刀洗空港と東京との間で航空機による郵便と貨物の輸送が始まったこと、この3つが福岡のホタル献上を可能にした理由と考えられる(三輪町編、1998;九州産業考古学会編2008)。

福岡は從来の鉄道輸送に加えて、飛行機によるホタルの空輸を全国に先駆けて実施した県である。もっともホタルの航空輸送は皇族への献納との特殊事情があつて初めて成立したものだ。皇族への献上の場合、航空会社の好意で送料が無料とされたからである(昭和10年5月31日付読売新聞)。民間の通常のホタル取引だと送料がかかりすぎ、とても商売にはならなかつたはずだ。なお、昭和10年の大刀洗空港から東京へのホタル輸送の際は、陸軍參謀本部の山岡少佐が立ち会つたそうだから、現代の感覚で言えば大層大げさな話である(同年6月1日付九州日報)。

浮羽郡から東京に輸送されたホタルは天皇家と宮家に献上されただけでなく、上野不忍池や靖国神社、明治神宮等にも放虫された(保科、2018)。同地のホタルは“筑紫螢”と呼ばれ、昭和の東京人に馴染み深いものとなるが、もちろん現在の科学的見地から言えば、遠隔地からのホタルの移入は決して望ましい状況ではない。

新聞記事をたどると、浮羽郡のホタル献納は昭和9年の同郡内の小学校児童によるものが最初である(同年6月7日付読売新聞)。一方、皇族への献上記録を記した宮内省の史料である『進獻錄』(宮内庁書陵部所蔵)では、昭和12年に吉井尋常高等小学校及び浮羽工業学校から、昭和13年には浮羽工業学校から、昭和14年には浮羽工業学校及び船越尋常高等小学校から、天皇家へホタルの献納の記録が確認できる(保科、2020a)。

では、民間から天皇家へのホタル献上はいかなる手順を踏んだのか。昭和14年の『進獻錄』を例にとると(図1)、兒玉九一・福岡県知事から松平恒雄宮内大臣宛に「浮羽工業学校長と船越尋常高等小学校長から、天皇陛下および皇太子殿下へのホタル献納の願いが出ています。よろしくお取り計らい下さい」との文書が同年5月17日付で提出

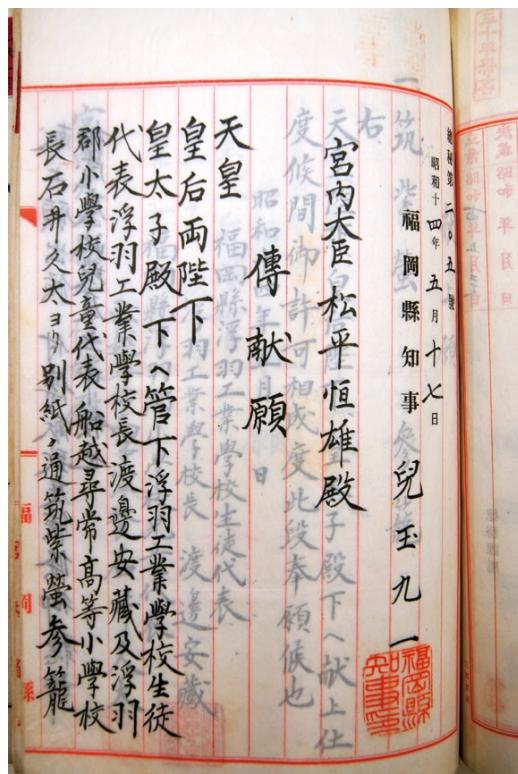


図1. 昭和14年『進献録』(宮内庁書陵部所蔵). 児玉福岡県知事から松平宮内大臣宛に県民のホタル献上願を通達した文書.

されている。そして、両校長からの松平大臣宛の献上願も県知事の文書に添えられている。その書類を受け取った宮内省側は、5月23日付で福岡県知事宛の「ホタル献納を了承しました」との通知が宮内次官名で出されて、あとは両校長が献納準備を進めることになるのである。

献納が許可された後に浮羽工業学校長と船越尋常高等小学校長が宮内省に送った文書によると、ホタルを入れる籠は天皇・皇后両陛下への献納分だけが長形で、皇太子殿下や山階宮殿下、明治神宮、靖国神社への送付分は円形である。天皇家や宮家、神社へ献上する螢籠が全部同じ形だと、どうやら天皇への不敬行為になるらしい。また、天皇・皇后両陛下へ献納する螢籠にだけ「献上」と明記したそうだ。現代人には中々理解しがたい感覚である。

戦前の帝国臣民は自由に天皇家や宮家に地元の物産を献納できたわけではない。『進献録』を見ると、戦前の皇族への献上の大半は、浮羽工業学校及び船越尋常高等小学校の事例のように、県知事経由で申請がなされていることがわかる。つまり、県知事が県民の献上希望を却下すれば、その時点で話は終わる。また、宮内省側が献上を許可しな

いこともあった(保科, 2020a)。つまり、皇族への献上は一部の臣民のみが与えられる栄誉なのである。

さて、その栄誉を得たいがためか、昭和9年の浮羽郡の小学校児童からのホタル献納には様々な裏事情がある。小学校からのホタル献納となれば一見「天皇陛下に喜んでもらいたい」との純真な子供の意思が感得されるが、実際はそんな美談ではなかった。同年の浮羽郡の献納の場合、まず三浦県会議員らが、浮羽郡内の小学校児童から皇太子殿下へホタル献納を立案した。そして、浮羽工業学校に螢籠の製作が依頼された。それを受け、同校の新井教諭が設計を担当し、家具科の3年生が心身を清めて籠を製作したと言う(福岡県立浮羽工業高等学校編, 1956)。つまり、昭和期の浮羽郡のホタル献納の中心が浮羽工業学校になったのは、同校の生徒の強い勤王精神と言うよりは「籠を作るのに便利だから」との技術的な理由にすぎない。そして、ホタル献納は決して子供の自発的発起ではなく、県会議員らが裏で糸を引いているのである。おそらく、この手の裏話は福岡だけではなく、他県の学校からのホタル献納にも似たような事情があったとは思うが、嫌な話である。子供をダシにして、大人が目的を遂げようすること、昭和戦前期も令和も何も変わりはないのである。

### VIII. 近代福岡の螢雑話

このVIIIでは、近代福岡県における単発的なホタル関連の新聞記事を簡単に紹介する。

(1) Iで述べたように、明治後半から昭和戦前期まで、鳴く虫やホタル、カジカガエルは市場価格が記事になっていた。しかし、その記事は東京府下の新聞に掲載されたものが大半で、福岡を含む地方新聞では価格は記事になっていない。かと言って、地方都市の縁日で鳴く虫やホタルが売られていなかつたわけではない。図2は、大正初期の福岡県内の螢売りの貴重な写真である(大正2年6月9日付福岡日日)。残念ながら、この写真には何の説明もない。福岡市内におけるホタル1頭の価格は定かでない。

(2) 大正4年6月12日付九州日報に「ほたる 箕崎花壇」とだけ表示された広告が掲載された。箕崎とは、つい最近まで九州大学箱崎キャンパスがあった場所だ。このあまりに簡潔な新聞広告だけでは何のことかさっぱりわからないが、その2日後の同紙に「菖蒲 さつき開苑 箕崎花壇」との広告が載っている。よって、おそらくは他所から事前に買い集めていたホタルを菖蒲園に放す催



図2. 大正初期の福岡県内の螢売り（大正2年6月9日付福岡日日）。

し事だったにちがいない。東京の目黒では明治28年に料亭旅館の大國家が「ホタルとカキツバタは今が盛り」との新聞広告を出しているので（同年6月17日付読売新聞），アヤメとホタルの組み合わせは当時の商売人の頭に浮かぶ発想だったようだ。

(3) 日本でラジオ放送が始まったのは大正14年3月22日である（竹山，2002）。昭和10年代になると、全国の放送局はスズムシやカンタン、カジカガエルなどの鳴き声の生中継を始めた（保科，2017b, 2019；Hoshina, 2020）。福岡では昭和10年6月、小倉放送局が小倉市紫川（現在の北九州市）からカジカガエルの鳴き声と螢狩りの様子を実況中継した。同放送局は、翌11年6月13日にも同様のラジオ放送を流すことを決定した。当日はカジカガエルの鳴き声とホタルを追う人々の歓声を背景に、川のせせらぎと尺八、端唄をも織り込んだ番組にする予定とのことらしい（昭和11年6月6日付九州日報）。そもそも、螢狩りはラジオ中継できるものなのか、との疑問がある。また、九州日報は「風物詩を電波にのせることとなつた」と記すが、川の流れにカエルに人々の大声に尺八に端唄とくれば、もはや風物詩ではなくカオスとしか思えないのは、現代人の筆者の発想たるゆえか。

なお、現在の北九州市水環境課には「ほたる係」との珍しい部署が存在するが、同市の人々がホタルと長く親しんできた歴史の反映かと思われる。筆者がこれまで調べた限りでは、昭和初期のスズムシやカジカガエルの鳴き声ラジオ放送は全国に

実例が多いが、小倉放送局の螢狩りの生中継はかなり珍しい事例ではあるまいか。

(4) 昭和11年6月13日付九州日報は、約30ヶ所ものホタルの名所を列挙した。それらには福岡県内ではなく、鹿児島、長崎、大分県内の名所も含まれている。さらにご丁寧なことに、記事中には最寄りの駅名、そして駅から名所までのバスの運賃まで書いてくれているのだ。当時、ホタルの名所が人々の間でいかに人気スポットであったかをうかがわせる記事である。

#### IX. 考察。“螢立縣”と呼ぶにふさわしい近代福岡

近代地方都市の螢狩りの全体的な考察は、(II)以降の名古屋や京阪神を取り上げた後に置いておきたい。ここでは、日本人と昆虫との関係はややもすれば美化される傾向があるが（たとえば、小西, 2007；奥本, 2019），ことホタルに関しては、到底美談で片づけられるものではない、とだけはっきり言っておこう。現代の価値観で過去の行いを評価するのは無意味だろうが、近代日本人が無数のホタルを使い捨てにしたのは、動かしがたい事実である。

I章述べたように、ホタルが新聞記事になるかどうかは記者の気分、そして新聞社の社風に影響される。よって、他県との地方新聞との直接比較は難しいが、感覚的な物言いが許されるなら、福岡県の地方新聞はホタル関連記事が多くったと言える。そして、九州一円からホタル見物の客を集めた船小屋温泉、西公園における大々的な螢狩り、全国に先駆けた東京へのホタルの空輸、螢狩りのラジオ放送その他諸々、近代福岡は“螢立縣”と呼ぶにふさわしい、ホタルとの縁が深い県であった。本稿では福岡に絞った2つの考察をしておく。

#### (1) 東京と同時期に始まった福岡の鉄道会社によるホタル放虫催事

かつて原宿の流行が地方に波及するまで〇年との数字があったが、鉄道会社の螢狩りについて見ると、興味深い事実が浮かび上がってくる。東京の玉川電鉄が開業したのは明治40年である（為国・榛沢, 1993；三科, 2015）。そして明治44年刊行『東京年中行事』には玉川電鉄が数万頭のホタルを玉川に放って螢狩りを催していることが記されている（若月, 1992）。実際、明治43年に同電鉄がホタル3万頭を玉川二子付近で放すとの新聞広告がある（同年6月17日付読売新聞）。一方の福博電車は明治43年開業で（入江, 1995；注、発足時の正式な会社名は福博電気軌道株式会社），その2年後

の明治45年には博多の西公園で螢狩りを催したことはV章で述べた通りだ。つまり、両鉄道会社は、大体同じ時期に開業し、かつ数年後には共に螢狩りを開催したことになる。福博電車は玉川電鉄の成功を真似したのか、それとも単なる偶然の一致かは微妙な時期のズレがあつて判断し難いが、結果的に鉄道会社主催のホタル大量放虫はあつと言う間に東京から九州に普及したわけである。

東京では、その後も王子電車、京濱電車、京王電車、東横電車などが同様の螢狩りを催している(保科, 2018)。自社の沿線上でホタルをばら撒き、当日大勢の客を運ぶ商売は、鉄道会社にとって手堅いビジネスだったことがうかがえる。では、鉄道会社にとって、螢狩りはなぜお手軽な商売だったのか。それは、当時のホタルが絶対的に安価だったからだ。ペット昆虫のホタルの市場価格は明治末から大正初期1頭3厘~5厘(0.3~0.5銭)である(保科, 2018)。東京朝日新聞1部が2銭と言う時代であるから、1頭のホタルの価格は現在の貨幣価値で数十円程度にすぎない。しかも、この3厘~5厘はあくまで町中の小売価格であって、卸値ではない。

ここで、明治45年の1頭のホタルの小売価格を現在の30円と仮定して、同年に福博電車がホタル購入にいくら支出したかを令和の貨幣価値で大雑把に概算してみよう。明治33年6月11日付萬朝報によれば、ホタルの小売価格は卸値の5倍とのことなので、ホタルの卸売価格はたった6円である。しかも十万単位の個体を取り引きすれば当然単価は下がったはずだから、福博電車は1頭4円で買い上げたとする。そして、明治45年に同電車が集めたホタルは50万頭なので、必要経費は200万円となり、たかが知れている。他にも必要経費はかかったにせよ、この程度のコストなら、当日の電車運賃収入その他で簡単に回収できそうだ。しかも、V章で述べた通り、福博電車は業者ではなく一般市民からホタルを調達したから、相当買い叩けたはずである。

このように、鉄道会社からすれば、自社主催の螢狩りはリスクが少なく、それなりに美味しい商売だったことが推察される。低リスク、低コストのビジネスモデルが背景にあったが故に、全国の鉄道会社が競うように螢狩りを催していたとも言える。実際、京都宇治の螢狩りは相当程度に稼いでいたと思われるフシがある。これについては(II)以降で解説することになるだろう。もちろん、全国の鉄道会社が先を争ってホタルをかき集めた結果、各地で乱獲が進んだことは言うまでもない。

## (2) 近代福岡県内のホタルの大規模人為移動

明治30年代には数十万単位のホタル放虫が東京のあちこちで行われるようになると、当然東京の近隣でホタルの乱獲が進んだ。早くも大正3年には山梨県で乱獲の影響が見られるようになる(大正3年6月10日付読売新聞)。東京近郊では最大のホタル供給地であった武州大宮も、昭和7年に見沼のゲンジボタルが天然記念物の仮指定を受けしており(大宮市史編さん委員会編, 1969), 同地域のホタルの激減ぶりは悲惨なものがあった(神田, 1981)。江崎(1984)が乱獲を懸念した船小屋のゲンジボタルも昭和16年3月に天然記念物に指定されている(筑後市史編さん委員会編, 1995)。この他、大正時代以降、各地で県がホタルの禁漁区を設けた事例も多く(保科, 2018), 全国のホタルの徹底した乱獲ぶりが容易に推察される。

早い時期にホタルを捕りつくしてしまった東京や京都は、催し事があるたびに他県からホタルを取り寄せていました。特に昭和期の全国的なホタルの一大供給地は大量養殖に成功した滋賀の守山で、東京の業者は守山のホタルを大量に買い付けていた(保科, 2018)。一方、筆者は佐賀県や大分県の地方新聞をポツポツ調べているが、今のところ、隣県から県境を越えたホタルの福岡県への大量輸送を記した新聞記事を見つけていない。また、福岡は関西から遠すぎて輸送費がかかるからか、それとも自前で供給できるだけのホタル個体群がまだ残っていたせいか、守山から養殖ボタルを購入した福岡県内の螢狩りも確認できていない。もっとも、「近代福岡に他県からのホタルの大量移入なし」と言うのは現時点での筆者の知見限りの話であって、今後それを示す新聞記事なり資料なりが見つかれば、状況が一転することはあらかじめ申し上げておきたい。

しかし、県外から福岡への大規模導入の記録は現状なくとも、筑後地方、その他県内のホタルが大量に博多に持ち込まれたのは、V章で述べた通りだ。近代の福岡県内で莫大な個体のホタルが人為移動させられたことは厳然たる事実である。当時の螢狩りは、客はホタルを自由に持ち帰ることができたので、自宅近辺にホタルを放した博多っ子も少なからずいたはずである。

現在の福岡県内のホタルの遺伝子の地域変異云々について、筆者は言及できる立場にない。実際のところ、螢狩りで放されたホタルはほとんどが野垂れ死にしたはずなので、倫理的な側面はどうかくとしても、近代福岡におけるホタルの人為移動は、保全生態学分野の問題を生じさせていな

いような気もする。

ただし、近代期に人の手によって運ばれたホタルの数は桁違いに大きすぎることは注意に値しよう。たとえば、放されたホタルが10万頭とすれば、仮に0.1%が生き残ったとしても、100頭が繁殖可能な個体となってしまう。十万、百万単位の放虫が毎年続くと、地域集団への影響を考えた場合、さすがに無視できない数字になるのかもしれない。

筆者が気になっているのは、地域のホタルの個体群が在来の集団なのか、他地域からの導入個体に由来するのかを考察する際、近代期の人為移動が全く考慮されていない点である（たとえば、矢野、2018；矢島、2019）。筆者の取り越し苦労であるとは思うが、福岡県内のホタルの遺伝子の地域変異を調べる際には、近代期にホタルの大規模な人為移動があった事実を頭の片隅に置いていただければ幸いである。

※本稿を執筆するにあたり、筆者は科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）の基盤研究（C）（課題番号：18K00254）の助成を受けている。

## 引用文献

- 筑後市史編さん委員会編, 1995. 筑後市史第二巻. 筑後市. 1317 pp.
- 江崎悌三, 1984. 船小屋の虫. p. 363–370. 江崎悌三著作集第3巻. 思索社. 401 pp.
- 福岡県立浮羽工業高等学校編, 1956. 創立五十年史. 福岡県立浮羽工業高等学校. 180 pp.
- 福岡市役所編, 1939. 福岡市市制施行五十年史. 福岡市. 338 pp.
- 平出鶴二郎, 1968. 東京風俗志. 原書房. 178 + 168 + 204 pp.
- Hoshina, H., 2017. The prices of singing Orthoptera as pets in the Japanese modern monarchical period. Ethnoentomology, 1: 40–51.
- Hoshina, H., 2018. The prices of fireflies during the Japanese modern monarchical period. Ethnoentomology, 2: 1–4.
- Hoshina, H., 2020. Kajika frogs (*Buergeria buergeri*) as premium pets during the Japanese modern monarchical period. Ethnobiology Letters, 11 (1): 96–102.
- 保科英人, 2016. 地方新聞による世論形成から見た希少水生甲虫類保全事情. さやばねニューシリーズ, (23): 29–33.
- 保科英人, 2017a. 近現代文化虫学. さやばねニューシリーズ, (26): 38–46.
- 保科英人, 2017b. 鳴く蟲の近代文化昆蟲學. 日本海地域の自然と環境, (24): 75–100.
- 保科英人, 2018. 明治百五拾年. 近代日本ホタル売買・放虫史. 伊丹市昆虫館研究報告, (6): 5–21.
- 保科英人, 2019. 文化蛙学. 近代日本人とカジカガエル. 日本海地域の自然と環境, (25): 127–136.
- 保科英人, 2020a. 宮内庁書陵部所蔵『進献録』に記された近代期天皇家及び宮家への昆虫の献納. 福井大学教育・人文社会系部門紀要, (4): 77–91.
- 保科英人, 2020b. 文化昆虫学. 別冊太陽, 日本のこころ, 282: 154–155.
- 保科英人・宮ノ下明大, 2019. 大衆文化のなかの虫たち. 文化昆虫学入門. 論創社. 318 pp.
- 入江寿紀, 1995. 福博電気軌道株式会社前史（一）. 西南地域史研究, (10) : 473–485.
- 入江政憲・三原種一郎・小川時, 1902. 福岡縣案内. 修文館. 75 pp.
- 神田左京, 1981. (復刻) ホタル. サイエンティスト社. 496 pp.
- 加納康嗣, 2011. 鳴く虫文化誌. 虫聴き名所と虫売り. エッセイ・エスケー. 155 pp.
- 片山慶隆, 2009. 日露戦争と新聞. 「世界の中の日本」をどう論じたか. 講談社選書メチエ. 245 pp.
- 近藤龜太郎編, 1913. 船小屋案内記. 鎌泉事務所. 37 + 19 + 97 pp.
- 小西正泰, 2007. 虫と人と本と. 創森社. 519 pp.
- 小谷春美, 1924. 博多湾鐵道沿線名勝案内. 博多湾鐵道汽船株式會社. 70 pp.
- 九州産業考古学会編, 2008. 福岡の近代化遺産. 弦書房. 205 pp.
- 三科仁伸, 2015. 玉川電気鉄道の設立と展開. 史学, 84 (1–4) : 85–108.
- 三輪町編, 1998. 大刀洗飛行場記録誌. 証言大刀洗飛行場. 三輪町. 53 pp.
- 森永卓郎編, 2008. 明治・大正・昭和・平成. 物価の文化史事典. 展望社. 477 pp.
- 日本史籍協会編, 1976. 繁仁親王日記. 五 東京大学出版会. 555 pp.
- 老川慶喜, 2016. 日本鉄道全史. 大正・昭和戦前篇. 中公新書. 228 pp.
- 奥本大三郎, 2019. 虫の文学誌. 小学館. 447 pp.
- 大宮市史編さん委員会編, 1969. 大宮市史. 第五卷. 民俗・文化財編. 大宮市. 923 pp.
- 高野孤鹿編, 1951. 西日本新聞七十五年史. 西日本新聞社. 467 pp.
- 竹山昭子, 2002. ラジオの時代. ラジオは茶の間の主役だった. 世界思想社. 352 pp.
- 為国孝敏・榛沢芳雄, 1993. 玉川電気鉄道の変遷と東京西南部地域の変容との関連についての一考察. 土木史研究, (13) : 221–231.
- 田山花袋, 1923a. 中仙道と秩父. p. 332–365. 花袋紀行集第二輯. 941 pp. 博文館.
- 田山花袋, 1923b. 東京近郊. 一日の行業. 692 pp. 博文館.
- 浮羽町史編集委員会編, 1988. 浮羽町史. 上巻. 浮羽町. 1042 pp.
- 若月紫蘭, 1992. 東京年中行事(下巻). 大空社. 410 pp.
- 矢島 稔, 2019. フィールドワークと、実物を見せる大切さに生きた(上). 昆虫と自然, 54 (9) : 20–23.
- 矢野 亮, 2018. 自然教育園におけるゲンジボタル 40 年間の観察記録. 自然教育園報告, (49) : 1–22.

(2020年5月15日受領, 2020年9月1日受理)

## 昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒 142-0051

東京都品川区平塚2丁目5番8号

郵便振替 00130-4-21129

電話 (03) 5858-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3784-6464

(カタログ贈呈) (株) 志賀昆虫普及社